チベット中世初期における般若中観論書の訳出（下）

稲葉正就

三　ゴクの大訳官ロデンシェラプ

ゴクのレクペーシェラプ Rńog Legs paḥi ǵes rab がアティーシャに懇願したので、清弁の中観心論とその註の思択焔の訳出がラサのトゥルナン寺で完成されたことは、前述した如くである（前号二九頁）。その後、レクペーシェラプは癸丑（1073 A. D.）にラサの南方でほど遠くないサンプ Gsaṅ phu にニェウトク Ńeḥu thog の大伽藍を建立した。それより、このサンプが清弁学説研究の中心地となった。

さて、このレクペーシェラプの甥に、すぐれた訳経者として、ゴクの大訳官ロデンシェラプ Rńog lo chen Blo ldan ǵes rab が現われた。この人の伝は、プトン史（154 a；Obermiller 英訳 p. 215）とゴンポ史（DT ca 37 b；BA pp. 324, 325；羽田野 p. 196）に見える。いまそれらにしたがって、かれの訳経のあとをたどってみよう。

ロデンシェラプは、己亥(1059)に生れ、幼時から伯父のレクペーシェラプの許に到り、伯父やポチェンワ・ツルティムシェラプ Spo chuṅ ba Tshul Khrims ǵes rab などについて聴聞した。かれの智慧がすぐれていたのを伯父が

悦んで、かれが一七歳になったとき(1075年頃)、カシミールへ留学させた。かれはカシミールでパンディタ・サッジャナ Pandita Sajjana とパラヒタバドラ Parahitabhadra をはじめとする六人に師事した。カシミール留学中の訳出としてゴンポ史には量荘厳 Tshad ma rgyan のみを記している。これはチベット大蔵経論部の因明の部に No. 5719 Prajñākaragupta：量評釈荘厳（Skal ldan rgyal po と共訳）として収録されている。

ゴンポ史にはこの訳出を記すのみであるが、大訳官 lo chen と呼ばれたほどであるから、種々なる重要論書の訳出を行なっている。同じく因明部に、ケンデンギェーポ Skal ldan rgyal po（Bhavyarāja）と共にカシミールのロンケルペメ Groṅ khyer dpe med（Anupamapura）で訳出したという奥書を有するものに No. 5748 Dharmottara：他遮詮と名づくる論というのがある。したがって、ケンデンと共訳の No. 5751 Dharmottara：刹那滅成就と No. 5755 Çaṁkarānanda：相続成就の二書は、その奥書に訳出場所を記していないが、おそらくカシミールで訳出したものと推定してよかろう。

ゴンポ史に、ロデンシェラプはカシミールでサッジャナとパラヒタバドラに師事したとある。チベット大蔵経論部の唯識の部に、サッジャナと共訳のものとして、No. 5525 Maitreya：大乗最上要義論と No. 5526 Asaṅga：大乗最上要義論解説〔究竟一乗宝性論〕があり、それぞれの奥書にカシミールのロンケルペメで訳出したとあるから、サッジャナに師事した間の訳出といえる。また、パラヒタバドラ Parahitabhadra（チベット訳名 Gshan la phan pa bzaṅ po）と共訳のものとして、No. 5710 Dharmakīrti：量決択と No. 5727 Dharmottara：量決択註疏があり、これらの奥書にもロンケルペメでの訳出とあるから、パラヒタに師事して訳出したに違いない。なお、ロンケルペメで訳出したという奥書あるものに、因明部の No. 5754 Çaṁkarānanda：遮詮成就（Manoratha と共訳）がある。

カシミールでの一七年間の留学中に、ロデンシェラプは主として因明と称勒の法を勉学し、それらの論書を翻訳したことは、プトン史にも記され、以上の訳出を一見しても明瞭である。ところで、般若や中観の論書もカシミールで

少しは訳出したように思われるが、奥書にそのことを明確に記載しているものは見当らない。

カシミールからチベットへ帰ったかれは(1092年頃)、ゴンポ史によると、ブムタクスムパ Ḥbum phrag gsum pa (Sthirapāla；この人の名は A. Schiefner：Tāranātha p. 189；独訳 p. 249；寺本訳 p. 334 に見える) とスマティキールティ Sumatikīrti とに法を聴聞したという。そこでチベット大蔵経の中を探すと、スマティキールティと共訳（あるいは校訂）のものとして論部の般若の部に、

No. 5193　Prajñākaramati：現観荘厳註摂義

があり、同じく中観の部に、

No. 5272　Çantideva：　入菩薩行の校訂

Nos. 5363＝5406　Jetari：発菩提心及び受持護儀軌

がある。しかしこれらの奥書には訳出（あるいは校訂）の場所を記載していない。ところが、因明部の No. 5723 Jāmāri：量評釈荘厳註疏極円浄（カシミールで訳出した前掲 No. 5719 の註釈）は、ロデンシェラプとスマティキールティとがニェタン Sñe than（ラサの西南方）の伽藍で訳出したとその奥書に記されているから、これら Nos. 5193, 5272, 5363＝5406 もチベットへ帰ってから、スマティキールティに師事して共訳したと考えてよいのではなかろうか。もちろん共訳した場所は、必ずしもニェタンではなかったかもしれない。というのは、No. 5272 の註釈である No. 5273 Prajñākaramati：入菩提行細疏は、スマティキールティとダルマタク Darma grags とがラサの地方ウィル Dbu ru (or Dbus ru) の北地区のチュンカカル Lcuṅ ka mkhar で訳出したとそれの奥書に記されているからである。

以上のほかにロデンシェラプが訳出（あるいは校訂）した般若中観の経論を列挙すると、先ずチベット大蔵経経部の般若の部に、

No. 734　八千般若の校訂

があって、その奥書に「カシミールとマガダ国の本を多く集めて刊定した」とある。次に、論部の般若の部に、

No. 5184　著者名欠：　般若波羅蜜多優波提舎現観荘厳頌（Go mi ḥchi med＝Amaragomin と共訳）

No. 5185　Vimuktisena：二万五千般若優波提舎論現観荘厳註（Go mi ḥchi med と共訳）

No. 5189　Haribhadra：八千般若釈現観荘厳明の校訂（Dhirapāla と共に校訂）

No. 5207　Diṅnāga：　聖般若波羅蜜多母摂頌〔円集要義論〕（Tilakakalaça と共訳）

No. 5208　Triratnadāsa：聖般若波羅蜜多母摂頌註解〔円集要義釈論〕（Thig le bum pa＝Tilakakalaça と共訳）

があり、同じく中観の部に、

No. 5278　著者名欠：　智慧品細疏（Mi mñam khol po＝Atulyadāsa と Rdo rje rgyal mtshan mos pa hi dbaṅ と三名で共訳）

No. 5336　Çantideva：集学論〔大乗集菩薩学論〕の校訂（Tilakakalaça と共に校訂）（奥書）Sri mdaḥ 寺で校訂

No. 5375　Niṣkalaṅkavajra：三律儀次第（Atulyadāsa と共訳）

No. 5442　Niṣkalaṅkavajra：曼荼羅儀軌（Atulyadāsa と共訳）

がある。これらは、No. 5336 を除いて、奥書に訳出場所を記載していないので、何処で翻訳したのかよくわからない。No. 5336 は奥書にシダー Sri mdaḥ の寺で校訂したとあるが、その位置をわたくしは未だ比定することができない。したがって、この中に既にカシミール留学時代の訳出があろうかと思われるが決定し難い。

またゴンポ史に、「しばらくではあるが、ネパールへ行ってアトゥルヤヴァジュラ Atulyavajra とヴァレンドラルチ Varendraruci などに真言の聴聞をなした。」とある。ヴァレンドラルチとの共訳は、般若や中観の部にはなく、秘密疏部にNos. 2259～2262, 2264 があって、それらの奥書に訳出場所を記していないが、おそらくネパールで訳出

したものであろう。ロデンシェラプは、しばらくの間しかネパールに滞在しなかったが、そこでも翻訳に従事したことは、秘密疏部の No. 2732 Samantabhadra：四支成就法広釈心苞（Nayanaçrī と共訳）の奥書にかれがネパールの首都（Bal yul mthil）で訳出したと記されているのをもって知ることができる。ここにネパールで師事したというアトゥルヤヴァジェラと前掲 Nos. 5278, 5375, 5442 の共訳者アトゥルヤダーサとは同一人でないようであるが、とにかくゴンポ史の他の個所（DT ña 16 b；BA p. 437）にアトゥルヤダーサもネパールに住した如く記されているから、これらの共訳はネパールで行なわれたのかもしれない。しかし、当時はネパールやカシミールに住した人も入蔵していることが多いから（プトン史 154 a；Obermiller 英訳 p. 216）、訳出場所が明記されていない限り何処で翻訳したか決定し難い。更にチベット資料の今後の研究に俟つ。

以上を概観すると、このロデンシェラプはカシミールで因明と唯識を学んだことは前述の通りであるが、般若現観にもよく通じて、それらの訳出に功があったことがわかる。かれの翻訳がすぐれたものであったことについて、次のような話がゴンポ史（DT ca 14 b, 15 a；BA pp. 271, 272；羽田野 p. 242）に出ている。すなわち、カーダム派のシャルワパ Çar ba pa が究竟一乗宝性論のアティーシャとナクツォ共訳本（前号三〇頁）にもとづいて釈説したとき、講学部においてロデンシェラプの訳本を用いるものが少しばかり出た。第二回目の釈説のときには、ロデンシェラプの訳本を使用するものが大部分となった。そこでシャルワパは、「福なきものらよ、ヂョオ Jo bo がなさった翻訳を信じないのか。」といって学徒を少し叱責した。しかし、それから後に二回釈説したのであるが、その際には二回ともすべてロデンシェラプの訳本を使用して釈説したという。現にチベット大蔵経にはアティーシャの訳本は収録されていない。なおまた、前述の如く（前号二二頁、二七頁）、アティーシャが二回校訂したと伝える二万（五千般若）明も大蔵経に収録されず、ロデンシェラプの訳が前掲の如く No. 5185 として収められている。

かれは、ラサやサムエなど処々で釈説したとき、学生は二万三千人という。すぐれた翻訳を残して五一歳(1109)で

サムエの近くの路上で逝去した。

四　パツァプの訳官ニマタク

さて、月称の主要論書の訳出は、漸くパツァプの訳官ニマタクSpa tshab lo tsḥa ba Ñi ma grags が出るに及んで完成を見ることになった。

この人の伝は、ゴンポ史（DT cha 7b; BA pp. 341, 342）に出ている。ところが、かれの生歿年次は明らかでない。しかしかれの共訳者として、前述のロデンシェラプの共訳者と同一人あるいはその弟子が見られるから、ロデンシェラプより少しおくれた出世と見做してよかろう。そこで、ゴンポ史によってかれの翻訳のあとをたどってみよう。

ニマタクは、ラサの北方のペンユル Ḥphan yul の上部パツァプの人で、若い時にカシミールへ行き、サッジャナ Sajjana（前述のロデンシェラプの師）の二人の御子など多くのパンディタに師事して法を聴聞し、二三年間勉学した。その長い滞在中に月称の主要論書を訳出したのである。いま、わかり易くするために、本偈とその註釈というように一対ずつ叙述してゆこう。先ず、

No. 5224　Nāgārjuna：般若と名づくる根本中(論)頌の校訂（Hasumati〔cor. Mahāsumati〕と共に校訂）

No. 5260　Candrakirti：浄明句論と名づくる中論釈（Mahāsumati と共訳。Kanakavarman と共に校訂）

をあげねばならない。龍樹の中論頌の訳出は、既に古代においてジュニャーナガルバ Jñānagarbha とルィギェンツェン Kluḥi rgyal mtshan によって訳出された。この両人は、中論の註釈である No. 5229 根本中註無畏、No. 5242 佛護根本中論註、No. 5253 根本中観註般若燈、No. 5259 般若燈広釈をすべて訳出した人であるから、これらの註釈によって中論頌の翻訳はおそらく厳密になされたに違いない。ところが、No. 5224 中論頌の奥書に、「後に、カシミールのロンケルペメ Groṅ khyer dpe med (Anupamapura) の都城(dpuṅ)の伽藍リンチェンペパ Rin chen sbas

pa (Ratnagupta) において、カシミールのケンポ・ハスマティ Mkhan po Hasumati (cor. Mahāsumati) とチベットの翻訳の訳官パツァプのニマタクは人王パクパラ Ḥphags pa lha (Āryadeva) の御代に浄明句釈と対照して校訂した。」とある。すなわち、ニマタクは古代の訳者が未だ手がけていない月称の中論釈と対照して古代の訳を校訂したというのである。そこで次に、No. 5260 月称の中論釈の奥書を見ると、訳出場所も共訳者も同じであって――ただインドのケンポ・マハースマティと記されている相違はあるが――カシミールの本と一致する如く訳出したとある。おそらく月称釈を訳出しながら本偈を校訂したのであろう。月称釈の奥書には更に「後にラサのラモチェ Ra sa Ramo che の伽藍で、カシミールのケンポ・カナカヴァルマン Mkhan po Kanakavarman とチベットの訳官自身（ニマタク）とが、東方ニオク Źi ḥog ǵar phyogs (東方 Aparānta) の本とあわせて校訂した。」と追記している。月称釈は、ニマタクがチベットへ帰ってから、ラサのラモチェの伽藍で別の梵本と校合して完成されたのである。

また、カシミールで訳出したものとして、

No. 5246　Āryadeva：四百論と名づくる頌（Sūkṣmajāna と共訳）

No. 5266　Candrakīrti：菩薩瑜伽行四百の広註（Sūkṣmajāna と共訳）（影印北京版総目録に、ニマタクを Rev. とするのは誤りで、Tr. の中へ入れねばならない）

があり、これらもそれぞれの奥書にカシミールのロンケルペメのリンチェンベェパの伽藍で訳出したと記されている。更にまた、カシミールでの訳出（あるいは校訂）の中、チベット佛教学で特に重要視されるものとして、

No. 5261　Candrakīrti：入中観論頌の校訂（Tilakakalaça と共に校訂）

No. 5262　Candrakīrti：入中観論（Tilaka と共訳。Kanakavarman と共に校訂）

No. 5263　Candrakīrti：入中観論疏（Tilakakalaça と共訳。Kanakavarman と共に校訂）

がある。先ず No. 5261 月称の入中観論頌は、その奥書によると、前述した如く（前号三三頁）、アティーシャの弟子

ナクツォとクリシュナパンディタ Kṛiṣṇapaṇḍita とによって訳出されていたが、それをニマタクがティラカカラシァと共に少しく校訂したという。ところが、奥書にはそれの校訂の場所を記していないので、必ずしもカシミールで校訂したとはいえない。しかし次の Nos. 5262, 5263 の奥書には、「カシミール国のロンケルペメの都城のリンチェンベェパの伽藍で、カシミールの王ペルパクパラ Dpal bphags pa lha (Çri-Āryadeva) の御代にインドのケンポ・ティラカカラシァとチベットの訳官大徳パツァプのニマタクがカシミールの本と一致させて訳出した。」とある。ところで、No. 5261 と No. 5262 とは、題名を少し異にするが、実際はどちらも入中観論の本頌で同一内容のものである。ただ、語が前後逆になっていたり、同義異語に置きかえられていたりする相違は多少見られる。No. 5261 は、その奥書にある如く最初にナクツォによって訳出されたものとすれば、カシミール本とは別な梵本を訳したものかもしれない。それが後にニマタクによる校訂によって No. 5262 と極めて近似したものになってしまったのではなかろうか。とにかく、これら二訳が伝わっていて、北京版には二つとも収録されたが、デリゲ版には後者の No. 5262(＝東北目録 No. 3861) のみ収録された。おそらくデリゲ版編集者は No. 5262 を決定訳と見做したからであろう。ちなみに、北京版チベット文目録（影印第一五一巻一〇五頁 111 b, 漢文目録三六五頁 154 b も同じ）には反対に No. 5261 のみを掲げ No. 5262 を省いてしまっているようにうけとれるが、あるいは No. 5262 をも含めているのかもしれない。No. 5261 と No. 5262 とは、両者の関係についてなお研究の余地があるとしても、同一内容の本偈であり、次の No. 5263 はその註釈であることに間違いない。したがってニマタクは、前掲の中論の場合と同様に、註釈を訳出しながら本偈の訳出あるいは校訂を行なったと見做してよかろう。なお、Nos. 5262, 5263 の奥書には更に「後にラサのラモチェで、インドのケンポ・カナカヴァルマンと訳官自身とが、東方ニオク Ñi hog çar phyogs pa の本とあわせて校訂した。」と追記している。すなわち、No. 5262 の本偈と No. 5263 の註釈とは、ニマタクがチベットへ帰ってから、ラサのラモチェの伽藍で別の梵本と校合して完成されたのである。そうすると、No. 5262 の本偈は、

チベットへ帰って後に更に校正された点が No. 5261 と異ることになり、そういう最終的な仕上げがなされているからデリゲ版には決定訳として収録されたのかもしれない。なお今後の研究に俟つ。

ちなみに、因明部の No. 5749 Dharmottara：彼世間成就（Skal ldan rgyal po と共訳）は、その奥書に、カシミールの王ハルシャデーヴァ Harṣadeva の御代にロンケルペメのラトナラシュミ Ratnaraçmi の伽藍で訳したとある。

さて、ゴンポ史（DT cha 7b；BA p. 342）に、ニマタクは二三年間カシミールで勉学して帰国し、西チベットのプランパ Spu hraṅs pa の僧たちに請われてカンワペー Gaṅ ba spel 著作の阿毘達磨の註釈を訳出したと記している。それはチベット大蔵経論部の阿毘達磨の部の Nos. 5594, 5597 Pūrṇavardhana：阿毘達磨倶舎註疏随相（Kanakavarman と共訳）に相当し、この両者の奥書とも一致する。

次に、ゴンポ史（DT ca 15a；BA p. 272；羽田野 p. 242；DT cha 7b；BA p. 342）によると、ニマタクは故郷のペンユルへ帰って中観の釈説をなしたが、学生が非常に少なかった。そこでカーダム派のシャルワパ Çar ba pa が自分の多くの若い弟子を中観の勉学のために送ったという。これを以てもニマタクの月称中観説研究の造詣の深さに対する名声を知ることができよう。かれは中観の釈説のみならず、ここでも翻訳に従事した。というのは、

No. 5358　Atīça：経大集（Rgyal ba kun dgaḥ と Mdo sde ḥbar と三名で共訳）

という二三一葉に及ぶアティーシャの大作の訳出があって、この最後に偈が付けられているが、その中にパツァプロムポ Pa tshab rom po 地方のペンデンヤガン Dpal ldan ya gad（ya gaṅ）の大伽藍において訳出したとあるからである。

既に前に述べたように、ニマタクはカナカヴァルマンを招請してラサのラモチェの伽藍で、月称の中論釈と入中観論と同疏の校訂を行なった。また、チベット大蔵経論部の讃頌の部に、No. 2028 Nāgārjuna：出地獄（Tilaka と共

訳）があって、その奥書にロンケルペメのパンディタ・ティラカと共にラモチェで訳出したとある。また、同じく秘密疏部に、No. 2675 Nāgabodhi：吉祥秘密集会曼荼羅儀軌二十（Tilakakalaça と共訳）があって、その奥書にチャサ Bya sa の伽藍でインドのケンポ大パンディタ・ティラカカラシャと共に訳出したと記されている。チャサはサムエの東方でツァンポ河南岸にあり、ツェタンの Rtse thaṅ の西方近くに位置する。したがって、ティラカカラシャも入蔵しラサはもちろんのこと、サムエの東方まで足跡を残していることが知られる。ちなみに、ラサやチャサでの訳出は、ニマタクがペンユルへ帰る前か後か明瞭でない。

以上のほかに中観の部にニマタクの訳出として、

No. 5225　Nāgārjuna：六十頌如理〔六十頌如理論〕（Muditaçrī と共訳）

No. 5470　Nāgārjuna：菩提心解説（Rab shi chos kyi bçes gñen を主として、Gu rug Chos kyi çes rab, Seṅ dkar Çākya ḥod, Çes rab grags, Mar pa Chos kyi dbaṅ phyug, Pa tshab Ñi ma grags, Maṅ nad Grags ḥbyor çes rab 共訳）

があるが、訳出場所など不明である。

なお、ゴンポ史（DT cha 7 b；BA p. 342）に、月称の空七十の註釈はアバヤーカラ Abhayākara とヌルのダルマタク Snur Dharma grags によって訳出されていたが、ニマタクはムディタ Mudita と共にそれの初の三〇〇シュローカ çloka 以上を校訂したと記述している。ところが、現存チベット大蔵経には空七十の月称釈が No. 5268 に収められているが、北京版デリゲ版ともにニマタクとムディタの校訂について何ら触れていない。全部の校訂を完了したのではないからかもしれない。

更にまたゴンポ史（DT cha 8 a；BA pp. 342, 343）には引続いて、秘密集会 Guhyasamāja の大註釈燈作明は、すぐれた翻訳者と称されるリンチェンサンポがそれを訳出したことを自ら誇りとしていたが、ニマタクはその翻訳が如

実でないことを発見して正しく訳し直したといっている。現在チベット大蔵経を見ると、燈作明の月称広釈が No. 2650 に収録されているが、校訂者はナクポ Nag po とラェツェ Lhas btsas となっていて、ニマタクの名は出ていない。

さて以上を概観すると、ニマタクの大きい業績は何といっても月称の主要な中観論書の訳出であることに対して誰も異論がないであろう。インド大乗仏教研究者に最も親しみある月称の中論釈のチベット訳文が如何にすぐれたものであるかはここに述べるまでもない。もってかれがすぐれた翻訳者であったことを知ることができよう。

むすび

「まえがき」において、現存チベット大蔵経の論部の中、般若と中観の論書は、チベット古代すなわちランダルマ王（在位841—846）の廃佛までに訳出されたものが約五分の一に過ぎないことを述べた（前号二〇頁）。古代に唯識の論書は約半数、阿毘達磨のそれは約三分の二が訳出されているのと比較すると、余りにも相異が大き過ぎるのである。それは何故であろうか。

先ず、チベット大蔵経論部の中観の部には、アティーシャ小部集の多くが収められている。これは百部集ともいわれ、アティーシャの数多い著作及びかれの教学の起源となった論書類を指す。これらの殆んどが中観部に収録されているから（前述のアティーシャの項のかれの著作類を参照）、中世の訳出の数を著しく増すことになった。

次に、般若や中観の論書は、顕教を学ぶ者にとって重要なものであるが、密教にとっても同様である。密教教学も般若中観説を基盤とするのであるから、チベット中世に密教が発達する段階において、古代に翻訳洩れとなった般若中観論書は、洩れなくすべて早急に訳出されねばならなかった。また、既に古代に訳出されたものも、適正でない翻訳は、校訂が加えられる必要があった。それ故に中世の初に相ついで出た上述のすぐれた翻訳者たちは、みな般若中

観論書を訳出（あるいは校訂）したのであり、その結果その大半が訳了されたのである。

さて、古代に訳出洩れとなった中観論書の中、特筆すべきは清弁と月称の主要論書である。清弁に帰せられている中観宝燈論は、アティーシャがインドのソーマプリー寺で入蔵前にツォンドゥセンゲとナクツォと共に訳出した（前号二五頁）。清弁の中観心論とその註思択焔は、ゴクのレクペーシェラブの懇願によって、アティーシャがラサのトゥルナン寺でナクツォと共に訳出した（前号二九頁）。ここに清弁学説研究が興り、その後レクペーシェラブが一〇七三年にラサの南方サンプに大伽藍を建てたので、そこがその研究の中心地となった。

それよりしばらくおくれて、ニマタクが出て月称の中論釈や入中観論頌とその自疏などをカシミールで訳出し、更にラサのラモチェ寺で校訂し完成するに及んで、月称学説研究が興ることになった。ラモチェ寺は七世紀初にソンツェンガムポ王の妃で唐より嫁した文成公主によって建てられた寺で、同王の妃ネパール公主によって建てられたトゥルナン寺と並ぶ名刹である。先にトゥルナン寺で清弁の中観心論註思択焔が訳出され、いままたラモチェ寺で月称の論書の訳出が校訂完成されたのは、まことに好対照とでもいうべきである。

一般に、チベット佛教学は月称の中観説に基づくといわれている。しかし上来、訳経の経過をたどってみると、むしろアティーシャによって清弁学説研究が先に興り、その弟子レクペーシェラブによってサンプに伝承された。月称学説研究はニマタクの月称論書の訳出完成によって興起したのであるから、しばらく――おそらく数十年ほど――おくれたわけである。おくれはしたが、ニマタクの訳出はチベット佛教学研究に大きい影響を与え、それより後は次第に月称学説研究へ転換をはじめるのである。そしてツォンカパ(1357―1419)に至って、かれが月称の教学を採りあげるに及んで決定的となった。その後ツォンカパのゲルク派 Dge lugs pa が次第に優位を占めたから、そのためチベット佛教学といえば月称の教学に基づくと考えられるようになった。しかし実際は清弁研究の方が先にはじまったのである。それでは、何故に清弁研究が先に行なわれたか。またそれにもかかわらず何故に月称研究へ転換したか。チ

ベット人には論理的な清弁の学説は適しなかったからであろうとしばしばいわれる。しかし果して単にそれだけの理由からであろうか。これらの究明はチベット佛教学教理史の面からもあわせ考えねばならないので、いまは般若中観論書の訳出過程を述べるにとどめたい。（完）

BA　G. N. Roerich : The Blue Annals. Calcutta, I 1945.

DT　Deb ther sṅon po.

羽田野　羽田野伯猷「カーダム派史」（東北大学文学部研究年報第五号所収）

ナンバーは影印北京版西蔵大蔵経による。

般若中観部の経論はわかり易くするために特に行を改めて掲出した。

追記　前号三一頁二行目 Tshaṅs paḥi ḥbyuṅ gnas はサムヤにある（P. Cordier : Catalogue du Fonds Tibétain. Paris, 1914. III p. 450 参照）から、No. 5267 五蘊論の訳出を前号二八頁八行目附近で述べるべきであった。

前号二八頁一三行目 thaṅ は thaṅ と訂正。